

## 特色ある共同利用・共同研究拠点 期末評価結果

大学名	京都造形芸術大学	研究分野	芸術一般
拠点名	舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点		
学長名	尾池 和夫		
拠点代表者	天野 文雄		

### 1. 拠点の概要 ※期末評価報告書より転記

#### [拠点の目的]

本研究拠点は、舞台芸術一般の学術研究において、舞台芸術作品の創造・受容の多様なプロセスを、「劇場を用いた研究」という手法を通じて実践的に探究していくことを目的としている。具体的には、本学研究者が中心となって行う「テーマ研究課題」と、学外の研究者に広く公募する「公募研究課題」（平成26年度より実施）に基づいた各研究プロジェクトが、本学が所有する本格的な劇場施設である「京都芸術劇場」（大劇場：春秋座、小劇場：studio21）を使用した「劇場実験」を核として、上記目的を達成し、広く公開していこうとするものである。

芸術系大学のコアは、何よりも芸術作品の「創造」にある。しかし、国際的な競争が進行する現代日本の状況においては、未来の「創造」のための実験機能や研究機能の充実が急務であると言える。芸術系大学における「作品創造」の役割を〈ファクトリー機能〉、「創造のための研究や実験」の役割を〈ラボラトリー機能〉と名付けるならば、本研究拠点における各研究プロジェクトは、もっぱら後者の機能を担い、日本における舞台芸術の創造と研究の有機的な結びつきを目指した新たな研究手法のパイオニアとなることを目的としている。各研究プロジェクトは、研究者とアーティスト（芸術系大学に所属する者を含む）が共同で研究チームを組み、「劇場実験」を、それぞれの研究プロセスの中心に据えたプロジェクトを実施する。

#### [拠点における成果及び目的の達成状況]

本研究拠点における研究事業は、「総合的な舞台芸術学」もしくは「総合的な劇場学」という新しい研究分野を切り拓くことを長期的な目標とした、これまで試みられたことのない研究事業である。過去6年間の研究成果は以下の通りまとめることができる。

##### (1) 目的の達成状況、及びその成果

- ① 当初掲げた「舞台芸術一般の学術研究における、作品の創造・受容の多様なプロセスの実践的探究」という研究目的は、十分に達成された。拠点認定からの6年間に、「テーマ研究課題」「公募研究課題」をあわせ、延べ31の研究プロジェクトが多様な活動が展開され、伝統芸能、現代演劇、コンテンポラリーダンス、現代美術、現代音楽、メディアアート、実験映画等の異なる領域を横断する多様な創造・受容のプロセスが探究され、多くの研究成果を得ることができた。こうした新たな手法による舞台芸術研究は、美学・芸術哲学研究、文学研究、社会学研究、民俗学研究等や、LED照明やモーションキャプチャー技術の先端的な応用研究、さらには「障害者との共生」のような社会課題等とも部分的に接続されることで、舞台芸術の創造・受容を、現代における社会的な視野のなかでの多角的な考察が可能となった。
- ② 当初掲げた「研究者とアーティスト（芸術系大学に所属する者を含む）が共同研究チームを組むこと」、「「劇場実験」を研究プロセスの中心に据えたプロジェクトの実施」という研究手法は、十分に機能した。5年目までの実績では、本研究拠点の研究活動に参加した研究者及びアーティストの実数は、508人にのぼるが（平成30年度は研究進行中のため未確定だが、100人前後になる見込み）、全て「共同研究チーム」という形態による参加であった。「テーマ研究課題」「公募研究課題」として実施された全ての研究プロジェクトは、「京都芸術劇場」を

研究目的に応じて効果的に活用した「劇場実験」を実施し、その大部分は一般公開された。こうした共同研究チームのなかには、国際的な協働作業を行ったものも含まれており、アメリカ、フランス、ドイツ、イタリア、スウェーデン、韓国、台湾、シンガポール等のアーティスト、研究者の参加を得ることができた。

- ③ ②の結果として、「日本における舞台芸術の創造と研究の有機的な結びつきを目指した新たな研究手法のパイオニアとなること」という当初目的は、十分に達成された。新しい実践的な舞台芸術研究における「ファクトリー機能」/「ラボラトリー機能」という概念の有効性は、3年目終了時点で実施した外部評価レポート、及び学外者として参加している運営委員による内部評価においても高い評価を得て、いまや定着しつつある。これに関連して、本研究拠点リーダーのメンバーが中心となり、「ラボラトリー機能の構築」に特化したテーマを掲げた大型研究プロジェクトは、科学研究費・基盤研究（A）に採択されている（※）。

※「「大学の劇場」による「ラボラトリー機能」の構築——芸術系大学の実践的研究モデル」（研究課題/領域番号：17H000910、研究代表者：天野文雄、平成29-31年度）を指す。

## （2）関連研究者コミュニティ及び研究分野に与えた影響等

研究の特性上、本研究拠点に関連のある「研究者コミュニティ」とは、研究者だけでなく、舞台芸術作品の創造・受容に直接携わっているアーティスト、技術者等も対象となる。

- ① 「アーティストと研究者が共同研究チームをつくり、劇場実験を行う」という本研究拠点の研究手法については、毎年平均約100名のアーティストと、研究者が参加する基盤はすでに完成しており、本研究拠点自体が、新たな研究コミュニティの実質をすでに備えつつある。「日本演劇学会」「舞踊学会」「表象文化論学会」等に属している研究者も少なくなく、複数の学会を横断的に結ぶ場が誕生しつつあり、実演家と研究者の共同的なコミュニティの成立基盤ができたことは、日本の舞台芸術学にとって画期的であるといえる。
- ② 20世紀演劇史を代表するポール・クローデル、サミュエル・ベケット、ウラジーミル・マヤコフスキー、秋元松代、太田省吾等の劇作家が「劇場実験」という手法を通じて研究されることにより、従来のアプローチでは得られない数々の知見を得られ、大きく研究全体の前進に繋がった。
- ③ 舞台芸術学において近年発展しつつある「ドラマトゥルク研究」と「アートマネジメント研究」を、「ラボラトリー機能」を通じて、創造の現場と接続された実践的研究にまで深化させることができた。過去6年間の本事業を通じて、公募研究にそれぞれ2度採択された木村覚、中島那奈子、横堀応彦の3名は、「ドラマトゥルク」として創造現場に関わる新しいタイプの若手・中堅の舞台芸術研究者であり、彼らの研究活動を通じて、本研究拠点の特色を活かした研究モデルの構築が可能となった。
- ④ 「アーティスト・技術者と研究者の共同研究」（＝「大学の劇場」におけるラボラトリー機能）という手法を通じて、舞台作品創作の現場に、「研究」が積極的な刺激を与える「創作のプロセス」のモデルを構築することができた。本研究拠点の研究成果がベースとなり、本研究拠点における研究活動の終了後に、本格的な舞台芸術作品7本が一般の劇場において創作・発表されたことは、「作品創造を視野に入れた創造プロセスの研究」を特色とする本研究拠点にとっての大きな成果であった（具体的な作品の概要は、本報告書で後述する）。また、そうした研究事業に参加した20代後半から30代前半の、主として京都・関西圏で活躍する若手アーティストや技術者が、それぞれに吸収した研究成果を応用し、その後に芸術的な飛躍を遂げるきっかけともなった。

## 2. 評価結果

(評価区分)

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティにも貢献していると判断される。

(評価コメント)

当該拠点は、舞台芸術一般の学術研究において、舞台芸術作品の創造と受容の多様なプロセスを、劇場を用いた研究という手法を通じて実践的に探求することを目的として、拠点活動を概ね順調に行っており、関連コミュニティにも貢献している。

特に、総合的な舞台芸術学・劇場学という新たな研究分野の創生を目指し、公募型共同研究等において、研究者とアーティストが共同でチームをつくり、領域横断型の研究プロジェクトに取り組むことにより、研究者のみならずアーティストや技術者を含むコミュニティが生まれつつある。

今後は、引き続き、舞台芸術の創造と研究の有機的な結びつきを目指した研究を進めるとともに、共同利用・共同研究課題の募集・採択方法の改善や、若手研究者の育成に積極的に取り組むなどにより、拠点活動の一層の充実を図ることが期待される。